

## ●1995以降

年が明けてすぐに報道された、オウム施設付近でサリン残留物検出、という報道に、やはりオウムの回りで（中で、ではなく）なにか起っているらしいというふうに思いはしたものの、そのころの頭の中は現実的な生活のことでほとんど占められており、それほど関心を持たずにいた。2月に仮谷さん拉致事件が報道されはじめたころも、これは本当にオウムが潰されようとしている、と、警察やマスコミ、姿の見えない敵、などに憤りをもつことはあったが、やはりどこか遠いところの出来事で深刻になれるわけもなく、それは地下鉄にサリンがばらまかれ上九一色に強制捜査が入ってからも変わることはなかった（地下鉄で毒ガスが発生したという第一報は、報道からではなく地下鉄有楽町線の場内放送で聞いたにも関わらず、自分のことというより、なにかたいへんなことが起こりはじめた、という傍観者気分視聴者気分であった）。仮谷さん事件に関しては「救済」の一貫でオウムが連れ去ったんじゃないかとまでは考えられたが、まさかサリンをばらまいたり警察のトップを撃つなんていう、自分の首を絞めるまねをするわけがないと思っていた。

強制捜査後まもなく、私がオウム信徒であるということを知っている兄姉から電話がくるようになる。すでに脱会していたということは知らせてなかったもので、それを言っただけでひとまず安心させ、その後、地下鉄の事件はオウムだとは思えないし信仰も捨てていないということも伝えた。6人兄弟の末っ子ってことで、予想してたとはいえ度々かかってくる電話にはほとほとうんざりきて、姉のひとりとは「お互いに自分のことだけ心配してましょーや」とケンカ口調で電話を切った。心配されている、なんてことはたまらなく不快であった。よくオウムに出家してしまった者の家族が「お母さんは某々のことを思って心配してるんだよ」なんてのを聞いたときと同じような欺慢しか感じなかったのである。「心配だからああしろ、こうしろ」（オウムをやめろ）。心配しているほうの人間が考えている幸せが、誰にでも（少なくとも子供には、兄弟には、恋人には、友人には・・・）あてはまるもんだということを押しかけていっているなんてことには思いも至らない無神経さに腹が立った。そんな風に考えたのは、私がオウムの幸せこそが「本当の」幸せだと考えていたからだろう。うちの家族は、オウムをやめろとは言わなかったが、「心配する」なんてことは、心配する側の満足の問題であって、そういうことは私にわざわざ言うのではなく、自分の中で勝手に処理してくれという気持ちであった。

強制捜査が入るまでは、「オウム」という名前を声高には決して報道することのなかったマスコミが、堰を切ったように、オウム怪しオウム悪しオウム憎しオウム恐ろしを垂れ流し、マンジュシュリー・ミトラこと村井秀夫が刺殺されるに及んでは、さすがにオウムへの同情は強まり、麻原逮捕の前後、引越してはじめてオウムに連絡をとった。その時はさすがに忙しかったらしく、また後で連絡しますということであった。

同じころ、私の住む所轄の警察署から私服警官がやって来る。前に住んでいたところでも、坂本弁護士事件について聞きたいという警官に訪ねられていたことがあり多分来るんじゃないかと思っていたため、それほど慌てることはなかった。この時来た警官は、居丈高な態度でなく世間話でもするように接してくれたので、ここでもやはり、脱会はしたが信仰は捨てていない、サリン事件はオウムの犯行だとは思えないという正直な気持ちを話した。すでに林郁夫が自供をはじめていたころだったと思うが、警察や報道の情報なんぞ信じられるものじゃなかったし、ひょっとすると、林がオウムを引っかけるために適当なことをしゃべってるんじゃないかとも考えた。

何の得になるわけでもなし、まさかオウムの犯行じゃないだろう、とは思っていたものの、なにしろ麻原のタントラ・ヴァジラヤーナは、なんでもあり、だった。教義にま

で踏み込んでこられるとオウムに厳しいところがあると思ってたのに、そこらへんについて突っ込んだ報道というのはなかなか出てこなかった。私の見た範囲で、タントラ・ヴァジラヤーナについて言及したのは、TBS「ニュース23」にゲストで出ていた立花隆が最初だったように思う。

確かに、真理の体現者、正しさの唯一の源泉である（と思っている）麻原が、より多くの魂をより良い状態（麻原の言う良い状態）に引き上げるという意図でもって、サリンを撒いたりハルマゲドンを自ら起こしたりということは考えられる。後に教団がどれほど混乱しようとも、そうしたほうが、「良い」結果を得られると意図していたのかもしれない。林郁夫を始まりにして、サリンを生成していたらしい、火災瓶事件は自作自演だったらしい、などなど続々と流れる情報から、オウムの犯行の色が濃くなるに連れ、私が考えるようになってきたのは、これらは私の知りえないなんらかの意図があって行われているのだ、ということであった。こう考えれば、地下鉄サリン事件をはじめとする一連の犯行がすべてオウムのものであったとしても、信仰を捨てる必要はなくなる。

この、物質、肉体の世界は苦であるという麻原の世界観では、サリンを撒く行為も「良い」結果をもたらすと考えられ、それを共有しない世界観ではサリンをばらまく無差別殺人は「最悪」の結果をもたらす極悪非道の犯罪行為と考えられる。このようなことを書くだけでも、非常に緊張してしまうように、「人を殺す」という行為には、普通の環境に育っている者にしてみるとかなり根深い抵抗感がある。しかし、生活のすべてを、「修業するぞ修業するぞ修業するぞ」と修業し、「奉仕するぞ奉仕するぞ奉仕するぞ」と奉仕（ワーク）し、四六時中麻原の教義を叩き込むことに費やしていたものが、サリンを渡されたらどうするか。もちろん、その根深い抵抗感はサリンを撒いた者に多大な動揺を引き起こし、自供したり「罪」を悔いさせたりするのだが、行為をやめさせることはできなかつたし、今もそうすることは当然と思っている（だろう）新実智光や土谷正美、そして麻原のように、その世界観に住まい続けることはできるのである。私のように「こちら側とあちら側」、「オウムの世界観と普通の世界観」のぎりぎりの境界に直面したことのない人間には、どれほど非常識な考えであっても、頭のなかだけでいくらでも信じることができ、なぜそんな世界観にしがみついていたのかと言われれば、今常識的な考え方をしている人がいきなりオウムを信じるのがないように、それまでそうだと信じていたものをいきなり捨てるのは難しいものがあったのである。

夏の終わりころだったか、オウムから、合って話をしましょう、と連絡がきた。阿佐ヶ谷にあった教団関連のラーメン屋で出家信者2人と合っただが、彼等はほとんどへこんだ様子を見せなかった。村井刺殺時にあった使命感のようなものも、このころだいぶん削がれていた私は、入り口の扉からしきりに中を覗こうとしている一般人の目に無言の圧力を感じ、猛烈にいたたまれない気分であった。そんななかで「今から修業しに行きましょうか」とか「とりあえず道場に行って話をしましょう」と言われることは、なかなか耐え切れる負荷ではなかった。状況が状況だけに強くは引っぱれない信徒さんに、またこちらから連絡しますとかなんとかうやむやなことを言って、逃げるように別れた。昔のように、オウムの（麻原の）世界においてもそこそこ不幸でないことを狙った、いわば保険をかけるような信徒ではいられないことに改めて気付かされた。

サリンをばら撒くことさえ「麻原のなんらかの意図」に帰することで正統化（あくまで頭の中で）していた私の気分がオウムから離れるようになったのには、大きなきっ

かけがあったわけではない。歯が抜け落ちていくようにオウムから去っていく、私も教団の本などでよく知った高弟たちが、麻原を聖者と見なさなくなってくることによって、徐々に麻原に対する畏敬の念が減じてきたことは確かだろう。なにしろ、個々の体験によってオウムの真理を確信する人が多かった中で、ほとんど何の体験もしていない私がおの正しさを信じるようになったのは、それなりに知性を持っている多くの人たちが、真剣に教えに従い生きている、というところからきていたのだから。それでも、井上嘉浩が発した、残っている信徒たちへのメッセージってのは、一言で言って「わかってないな」というのが正直な感想であった。サリンによって殺された者の家族を苦しませ、大きな犯罪をおこしてしまった弟子たちを苦しめるような教えは間違っている、などと言っても、何十億、何百億、それ以上の時間のスケールで輪廻を説く麻原の教えを信じているものにとってはこれっぴかしも説得的でないし、苦しむのはカルマが落ちているんだからいいことなんだ、と言い返されたら、どう答えられるというのだろう。結局、井上の言葉は、井上を信じてオウムにとどまっている人には効果があるかもしれないが、麻原を信じている人には通じない、オウムから帰ってこいと説得する滝本弁護士たちの言葉と一緒にある。

(オウムから)落ちてしまった高弟たちが、どれほど麻原を告発するような言葉を吐こうとも、その立場は井上と同じように「常識的」なところからなされるよりほかなく、いつまでたっても麻原(の教え、世界観)を信じ続けることはできてしまう。実を言うと私も今だに、輪廻ってあるんじゃないか、なんて考えないこともないんだけど、まあ、概ねそういう世界観は捨てている。それはどのへんからきているかという、麻原の世界観には肝心なことの説明が欠けているように思えたからである。

立ち読みで読んだだけで、正確な細かい内容までは覚えていないんだけど、95年の終わるか96年頭頃の「小説TRIPPER」という雑誌の中で、高橋源一郎が書いていたのが、麻原は言葉について語らなかつた、ということだった。オウムについて書かれたものはどれもこれもほとんど面白くなかつた中で、shortcut本紙の影響から言語哲学関連の本なんかを読みはじめていた私には、この高源の文章にはたいへんピンとくるものがあった。

オウムの多くの信者が、麻原の言うことを正しいと信じるようになったのは、さまざまな神秘体験があったからだという。サクラこと飯田エリ子は今だに信仰を捨てていない模様なのだが、彼女も獄中での瞑想時に神秘的な体験をしたことで、やめようとしていた気持ちを翻らせたらしい。麻原が「これこれの修業をすれば、これこれの体験をするだろう」と言い、そしてそのような体験をする。「痛み」を感じたり、「青い」光りに包まれたり、「強い快感」がはしったり。では、その各人の「体験」が麻原の「体験」と同じだと分かるのはどうしてだろう。そもそも麻原が、ある体験を「最終解脱」だと言えるのはどこからくるのか。釈迦の言葉からではないのか。その同じさを保証しているのは言葉ではないのか。麻原も頼らなきゃならないこの「言葉」。どれほど神秘的で不可思議な体験をしたとしても、「至福感」と言い「苦痛」と言い、さらにはそういうことを「感じる」、とついつい言ったり思ったりしてしまうようなこの「言葉」、麻原の存在より超越的に感じられてしまうようなこのものの存在、麻原の世界観では捕え切れないこのものの存在は、私を「教え」の外にほうり出してしまったのである。

前段部分は、まだ麻原に言い抜けされてしまう気がするのだが、どのような言い抜けをしようとも、やはり麻原の世界観には決して登場しないものの存在を、今の私は確信している。麻原であれ誰のであれ、誰かの世界観には絶対に含まれないこの私、誰も彼もが言う「私」一般じゃなくて、今これここにこうしている私、言おうとして言えない永井均風なこの<私>。ここらへんのことは、私の下手くそな文章に惑わ

されないよう、是非「<私>のメタフィジックス」をはじめとする永井均氏の諸著作のほうを“てがかり”にしてほしいところなのだが、とにかく、すぐに見失ってしまいそうになる、でも確実なこのこれ、この<私>にまつわるもろもろに対し、不断に目を凝らし続けながらオウムについて考え続けていくことによってしか、かすかに残るオウムの桎梏を払い去ることはできないんじゃないかと今は思っている。

どうもうまくまとめることが出来ず、たいへん閉まりのない終わり方になってしまうのだが、今回はこのへんで失礼します。

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [5](#) 6